

編集後記

Borrmann 4 型癌のなかで、臨床上しばしば急速に進展し、発見しえた時点ではほとんど治癒の可能性のない症例で何ともいやな思いをしなかった人はいないであろう。この型の癌の早期発見を目的として、retrospective にみて原発巣がどのような部位、形のもので、どのような経過をたどるものかというむずかしい問題に挑戦しようと試みたのが 11 号、12 号の特集である。

このような癌をスキルス、びまん性癌、linitis plastica など、人によってその呼び方も定義づけも問題がないわけではないが、ともかく linitis plastica 型癌として集められた症例をみると、そのほとんどが胃底腺あるいは境界領域から発生した低分化癌で、II c 様または浅い潰瘍を示す集中像のあまりみられないものが多いという推定は確かのように思われる。

定義の統一をはじめ、Borrmann 4 型と称するもののうちこのような型の癌がほとんどを占めるものなのか、また幽門腺領域に発生したものではこのように一見非常に急速に進展するものがないのか、その粘膜内癌から完成された型になるまでの移り変わりやそれらの X 線、内視鏡所見など、まだ多くの疑問点はあるにしても、近い将来 Borrmann 4 型癌といわれてきたものの全貌が明らかにされることを期待し、その再出発点として読んでいただければかなり手ごたえのある特集ではないかと思う。

<西沢 護>

<編集> 早期胃癌研究会